



TITLE:

[書評]ヴィクトル・セガレン『二重のランボー』：ドゥブルからスペクトルへ

AUTHOR(S):

木下, 誠

CITATION:

木下, 誠. [書評]ヴィクトル・セガレン『二重のランボー』：ドゥブルからスペクトルへ. 仏文研究 1991, 22: 71-73

ISSUE DATE:

1991-09-07

URL:

<https://doi.org/10.14989/137773>

RIGHT:

ヴィクトル・セガレン『二重のランボー』

——ドゥブルからスペクトルへ

木 下 誠

1986年に出版された本書（Victor Segalen, *Le Double Rimbaud*, Fata morgana, 1986）は、「メルキューール・ド・フランス」誌1906年4月15日号に発表された同題のランボー論を中心に、その他の未発表論文の草稿や手紙など、セガレンがランボーについて書いたものをできる限り広く集めたものである。1905年にタヒチからの帰路、ジブチでランボーの生前の友人のリガース兄弟に対してセガレン自身が行なったインタビュー、その直後にパテルヌ・ベリションとイザベル・ランボー夫妻を訪れた時の報告と手紙、「二重のランボー」を書く際に依拠した「ボヴァリスム」の理論の提唱者ジュール・ド・ゴーチエ宛の手紙、1909年に中国へ行く途中にアデンでランボーについて書いた断片（これは後に1915年プレストで『^{ミカベ}羈旅』草稿の第一頁に書き写された）、1915年にクロードの『黄金の頭』に着想を得た「予言者と見者」という題の論文の最初の数頁……——植民地をめぐる西欧帝国主義の利害の対立が全世界的に表面化し第一次大戦へと突入していった1905年から1915年の激動の10年間に、セガレンが間歇的にランボーについて述べたこれらの文章を通し、われわれは、タヒチから中国へと次第に狭まりゆくヨーロッパの「外」を移動していったセガレンの舞台の上に常に現れるランボーという亡霊の姿の変遷を見ることが出来る。それはあたかも彼が中国の旅に携えて行ったクリスタル製の「旅の小さな神」（『^{ミカベ}羈旅）の中空になった脳——この透明の小さな彫像は、頭蓋骨の真ん中に光線の戯れによって輝く空間を抱え、そこには「あらゆる種類の流動的で東の間の思考」が住むことができる——のように、セガレンのその時々を思考を映し出している。

セガレンは、先に述べたように、ランボーのアフリカの痕跡に二度触れている。一度は1904年、絶滅の危機にあるタヒチのマオリ民族の治療のために海軍の船医として派遣された帰路、ジブチに停泊した時であり、もう一度は、1909年、今度は医師としてではなくパリの東洋語学校の留学生として、完全な中国語をマスターすべく中国に行く航海の途中、アデンに停泊した時である。1904年のジブチでは、ランボーの生前の友人だったアタナース・リガース Athanase Rigas とコンスタンタン・リガース Constantin Rigas の兄弟から「アフリカのランボー」についてインタビューを行い、その要約とランボーの詩——とりわけ「酩酊船」——の分析とを合わせて、翌年、「メルキューール・ド・フランス」誌（1905年1月15日号）に「二重のランボー」*Le Double Rimbaud*として発表する。1909年には、とりたててランボーについての調査をした形跡はないが、アデンとという名にランボーの名を喚起されたかのように、「アデン1909年5月5日。アデンは私の前に苦しみと曖昧な予兆に満ちた幽霊 un spectre douloureux et d'augure équivoque を立ち上がらせた。アルチュール・ランボーだ」という言葉で始まる短い断片を書き記す。

この二つの日付は言わば二つのセガレンを刻印している。神経の病いや多重人格、ヒステリー症状、共感覚など、精神分析学の黎明期にあった当時の心理学界の最先端の主題に関心を寄せ、「自然主義の作家たちにおける医学的観察」（後に『文学における臨床家たち』というタイトルでメルキューール・ド・フランス社から刊行）というタイトルの、文学と医学の両方に関わる医学修士論文によって医師の資格を得た後、医者として公務を果たすかたわら、レミ・ド・グールモンらパリの象徴派の作家たちと交わり、「メルキューール・ド・フランス」誌に「共感覚と象徴派」のような論文を発表していたセガレン、すなわち、いまだ医学と文学の間に宙吊りになっていたセガレンと、医学から文学への——中国を契機とした——決定的な移行の第一歩を踏み出したセガレンの。この二つのセガレンの両方にランボーの名が取り憑いているので

ある。一度目は「亡霊」doubleとして、二度目は「幽霊」spectreとして。

一度目のランボーは、文学に熱狂した詩人と、それを完全に否認する探検家という「二つの」人物の同居するランボーという意味で「二重」doubleである。セガレンはこの二重性を、当時、実験心理学の世界にデビューしたばかりのピエール・ジャネが「多重人格」を説明するために考え出した「下意識」(エレンベルガーによると、この言葉はジャネに由来する)の概念と、その文学への応用としてのジュール・ド・ゴーチエの「ボヴァリスム」の理論に依拠して説明する。「ボヴァリスム」とは、ジュール・ド・ゴーチエの定義では「自分を実際とは異なるものとして認識する、人間に授けられた能力」であり、後にセガレンが「自分が異なるものであると認識する能力」としての「エグゾティスムの力」という考えの基とするものである。ランボーとは夢想するエンマ・ボヴァリーの同類であるが、エンマがその一生を通して現実と空想の間で引き裂かれ、絶えずその間を往復したのに対し、ランボーは想像界の言葉をつむぐ詩人としての前半生と、それを全く否定する「現実」の世界に住んだ後半生との間に引き裂かれ、後戻りすることはない。この不可逆的な二つの人格は、ジャネの言うような、常に「意識」の下から飛び出てきて自由にその力を行使する「下意識」の問題というよりは、むしろ「モラルテ」の問題である。ランボーは一つの「モラルテ」からもう一つの、それとは根底的に対立する「モラルテ」へと一度限り完全に移行し、後には戻らない。それゆえアフリカのランボーが再び文学に復帰するなどということとはありえない。こうしてセガレンは、アフリカの詩人ランボーという二十世紀に至るまで根強く残っている神話(「精神の狩猟」というランボーがアフリカで書いたとされる作品が現れ、アンドレ・ブルトンが『現行犯』と題したパンフレットでその贗作性を糾弾したのは1949年のことである)をいち早く解体し、ランボーという人間の中に詩人と旅人との完全な断絶を読み取るのである。

同時に、このランボーは、船医という旅人としての生涯を生きるか、それとも文学者としてバリの文壇で生きるかという、両立不可能な二つの生の間に引き裂かれていたこの時期のセガレンに対して、自らの「分身ランボー (Le Double Rimbaud)」として脅迫のようにのしかかってもいた。が、セガレンはそれを、作品に現れた様々な「欲望」——「歓喜への欲望」、「過去への欲望」、「他の場所への欲望」、「富の欲望」、「現在への憎悪」等々——という一次資料や、友人の証言という二次資料を一つ一つ徴候を解説する医師のように読み解くことによって対象化した。その举措には、自然主義の作家の登場人物の医学的類型論を行った彼の修士論文やボードレールやランボーの詩を用いて共感覚を論じた論文と同じく、彼が19世紀の実証科学を通じて身に付けた方法論の厳密な適用を見ることができる。

ところが、1909年のアデンでは、徴候を読む術としてのこの実証的な解説は全く影をひそめ、セガレンはランボーをかつてのように分析しない。分析するのではなく、ランボーと対話するのである。セガレンはこの断片の中で、ランボーがハラルから家族に宛てて書いた手紙(「この生よりも悲惨な生は想像できない以上、この生は唯一のものであって、これ以外の生はありえない(……)」)を記憶によって引用すると同時に、それに加えてこのように書く——「私はさらに遠くまで行かねばならない。私は行く。私は答える——『君は〈現実のもの〉のために闘った。(……) 詩人である君は君自身を否定していた! そして筋肉と骨を持っていることを誇りにしていた。それでも、君の軽蔑していた詩人が君を導いて行ったのだ。そして、君がそれを身の破滅に至るまで否認したのは、まさに復讐の気持ちからに他ならない。』」

この対話において、ランボーは、もはやボヴァリスムの用語で名付けられる一症例ではなく、石のように、セガレンにとって消化し解決しえない一つの他者となる。セガレンの「分身」としての他者ではなく、あらゆる思考を受け入れるがゆえに唯一の概念に還元できない「幽霊=屈折光線」としての他者である。この「スペクトル」は依然として「苦しみ」に満ちた「脅威」ではあるが、あらゆる解説を越えている(セガレンがここで行う解説——それ自体かつての彼の読みとは異なるが——、それも単に一つの読解にすぎない。それゆえ、セガレンはこの自分自身の対話の声を、「これこそがランボー神話だ」と付け加えて相対化するのである)。それは、『^{エキゾ}旅』の主人公が、中国からチベットに至る回廊で、幼い頃の自分という分身に出会って会話を交わすことによって、〈現実のもの〉の徴候を〈想像のもの〉によって読み解きつつ

その読解が不可能になるまでに激しい二つの衝突を求めた旅を終えるのと同じである。セガレンの出会ったこのランボーという「幽霊＝スペクトル」もまた、「曖昧な予兆」として、セガレンの眼差しを逃れるのである。

分析から対話へのこの移行（「私はさらに遠くまで行く。私は行く。je passe outre. Je passe.」）、ここにセガレンの「文学」のすべてが刻み込まれている。それは、医学と文学、旅と詩、身体と言語の対立の上に成立する文学ではなく、それら両方を含み持つ活動としての「文学」である。セガレンが1915年、中国の旅を第一次大戦によって中断してプレストに戻り、この中国の旅をもとにした散文『羈旅』を書き上げた後、その第一頁にアデンでランボーについて書いたこの断片を書き写す際に、こう書き足したのは、このことを意識してのことだろう——「試論——〈旅人〉と〈幻視者〉／自分の見たものを書いた者たち。／旅する詩人たち。／言葉と格闘する〈旅人たち〉」。

セガレンにとっての旅の意義とは、自己の外に出る（exo-）という、語源的な意味での〈エグゾティスム〉の経験である以上に、言葉という〈想像のもの〉を手掛かりに「徴候」を読み取りつつ〈現実のもの〉の大地をいかに進んでゆくか、そしていかなる地点においてその〈想像のもの〉が読解不可能な「徴候」とさへ呼ぶことのできない「モノ」を前にして失墜するかをさぐることである。その最終的な核ともいべきものが、自己の分身としての「他者」であった。だが、その出発点においてもそれは、ランボーという名の中にすでに、現れていたのだと言えるのではないだろうか。「二重のランボー」において、セガレンがランボーの——例えば「母音」や「イリュミネーション」の——テキストをランボー個人の幼年期の全く個人的な記憶として、他人には理解しえないものとして提示する時、彼はランボーという名をいわば読解不可能性の代名詞として差し出している。ランボーはセガレンにとって、他者との同一化を越えた共存の原理として、他者を自己の似姿として「理解しない」権利の宣言とも言うべき〈エグゾティスム〉の発端に立っていたのだと言えるだろう。

セガレンが「〈エグゾティスム〉に関する試論」という、オリエンタリズムの根底的批判の書の最初のページを書くのは1904年10月、タヒチからの帰りの航海の途中であるが、それもまたランボーという名と結び付いた「ジャワ」（ジャワは、1876年夏に、ランボーがオランダのインドネシア侵略軍に志願して訪れた——そして脱走した——ランボーの東洋経験の東端である）に喚起されての事である——「ジャワを眼にしつつ、1904年10月。／〈エグゾティスム〉に関する書物を書くこと。」

（なお、本書所収の論文「二重のランボー」は、拙訳で、10月発行予定の『現代詩読本ランボー』思潮社、に収められている。）